

# みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL.20 No.2

(通巻71号)

平成5年9月1日発行

編集・発行人 白石竹雄

〒260

千葉市中央区中央港1丁目10番1号

☎043-242-8311(代表)



浅井 忠 「秋 郊」 1887年頃

(特別展「バルビゾン派と日本」展出品 中野美術館蔵)

浅井忠は、フオンタネージからバルビゾン派について学び、ミレーやコロドーのことを知りました。

この脂系と黒系色で描かれた作品は、フオンタネージの影響を強く反映した作品です。画面上半部の森と空の色調は、まさにフオンタネージの世界そのままです。

浅井の作品には、ほとんど点景人物が描かれています。あたかも自然の中に生きる人間をテーマにしているかのようです。バルビゾン派を代表するミレーもまた、同じテーマをモチーフとし宗教性を表現しました。しかし、浅井が描く人物は、ミレーに比べ何か物悲しさを漂わせています。人間は大自然の中に存在する小さな生命であると主張しているようです。

浅井は、自らのアトリエにミレーの作品をかけた、バルビゾン村を訪れ、また『一日の四つの時』のうちの昼景である「昼寝」を模写するなどミレーとの出会いにより、バルビゾン派的作品を描く日本の画家のひとりと呼ばれられるようになりました。

(前川公秀)

特別展

ミレーと浅井忠の出会い  
「バルビゾン派と日本」展

9・4(土)〜10・11(月)

この展覧会は、バルビゾン派が日本に将来され、どのように受容されたかをメインテーマとして、二つのセクションに分け構成されています。

I 日本に将来されたバルビゾン派の作品

バルビゾン派とは、一般的に、一八三〇年から七〇年頃まで、印象派の登場する前に、フォンテーヌブローの森あるいはバルビゾンの周辺の風景を取材し、新しい風景画を開拓したフランスの風景画家たち

この総称で、後世名付けられたものです。代表的な画家にミレー、コロー、ルソー、デュプレなどが挙げられます。

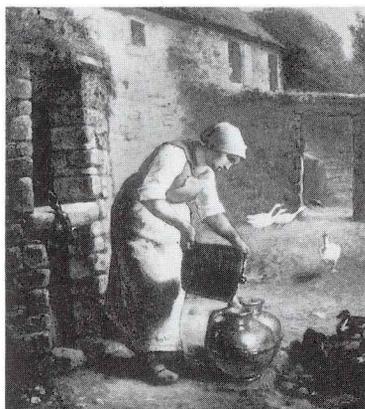
彼らの画風は、画家それぞれが独自のものを持ち多様ですが、アトリエでの画面の構成以上に、戸外における直接の自然観察による油彩習作を重視し、多くは自然主義乃至自然主義的写実主義と評されています。

このセクションでは、バルビゾン派の中心的画家九人の作品五十三点を展示します。

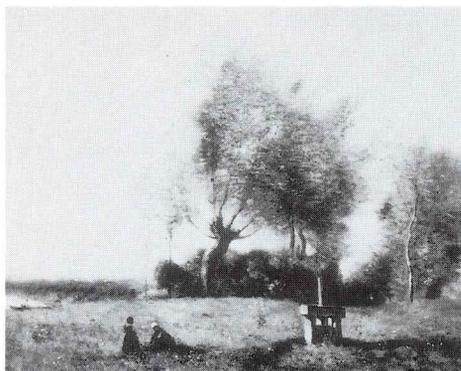
この他、バルビゾン町立バルビゾン派美術館とフォンテーヌブロー市役所の作品が特別出品されます。

II バルビゾン派の将来と受容

このセクションは、さらに三つのコーナーで構成さ



ミレー「ミルク缶に水を注ぐ女」



コロー「小さな水門のある草原」

(1) フォンタネージと周辺の画家たち

バルビゾン派の日本への将来は、フォンタネージによるところが大きいことはよく知られています。バルビゾン派の画風の流れに位置する画家のひとりであったフォンタネージは、明治九年新設された工部美術学校の教師として来日し、授業の中でミレーやコ

ローの話をしてバルビゾン派を紹介しました。教えを受けた画学生に、浅井忠、小山正太郎、松岡寿など次代を背負った画家たちがいます。

その中でも、特に浅井忠は最もフォンタネージの影響を受けたと言われています。浅井は、明治三十四年十二月バルビゾン村を訪れミレーのアトリエを見学し、「今は鎖してあるミレーのアトリエは内部を見る事が出来ぬ、村の入口にあつて実につまらない質素極まる四角な家だ」と感想を述べ、アトリエのスケッチをしています。またミレーやジャックの作品の模写なども行っています。このコーナーでは、フォンタネージを中心に、ラウイエや浅井忠、高橋由一など、バルビゾン派の受容に活躍した一〇作家二十八点を展示します。

(2) バルビゾン派の作品を模写した日本の画家たち

明治三〇年後半には、「美術新報」をはじめとする雑誌に、バルビ



フォンタネージ「水汲み場風景」

ゾン派に関する図版、画論、評伝などが次々に掲載され、ミレーの画集や伝記も相次いで出版されました。このようにバルビゾン派が日本に広く浸透するに伴い、バルビゾン派に絵画的もしくは精神的な魅力や価値を見出す画家も多くなり、渡欧した画家たちにより、また日本に留まっていた画家たちによっても、バルビゾン派の作品が頻りに模写されるようになります。バルビゾン派作品の模写は、同派の理解のために非常に有益なものであったばかりではなく、特にオリジナル作品を鑑賞する機会がほとんどなく、また画集や美術雑誌の写真図版も質の悪いものであった当時において、オリジナ

ル作品に代わり果たした役割について注目しなければなりません。その視点から、ここでは浅井をはじめ高橋由一、原田直次郎、鹿子木孟郎など十一作家の模写作品十四点を紹介します。

(3)バルビゾン近郊グレーを描いた日本の画家たち

一八七〇年頃になると、フランスではバルビゾン村に代わりグレー村が画家のコロニーとして注目されはじめます。グレー村は、フォンテーヌブローの森の南端に位置し、ロワン河の畔にある小村落で、森の北西にバルビゾン村があります。明治二十三年、日本人画家として初めて黒田清輝、久米桂一郎、河北道介が訪れてから、浅井や和田英作、児島虎次郎らが滞在し、一時期には日本の画家たちの聖地的な存在となりました。しかし黒田が訪村した時点で、グレーでの傾向は外光派乃至印象派の表現手法が主流となっていたため、日本の画家たちもそのような手法を身に付けています。とは言え、グレーでの活動は、「後期バルビゾン派」とも称することができ、彼らとバルビゾン派との関係



黒田清輝「グレーの水車場」

というテーマを提供しています。ここでは、五作家十一点の作品を展示します。なお本展は、山梨県立美術館、福島県立美術館と本館との三館による共同企画画により実施されるものです。

(前川公秀)

★開館時間  
午前九時～午後四時三十分  
(入場は四時まで)  
月曜日休館(ただし、十月十一日は開館)

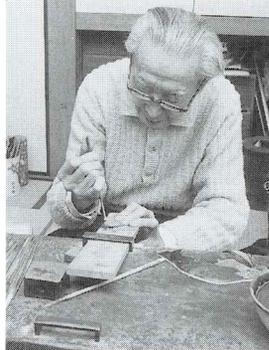
★観覧料  
一般五〇〇円(三〇〇円) 高・大学生三〇〇円(二〇〇円) 小・中学生二〇〇円(七〇円) (一)内は二〇名以上の団体料金

房総の美術家シリーズ23  
秋山逸生展

11・20(土)～12・24(金)

房総の美術家シリーズは、郷土に生まれ、あるいは居住して、近代日本の美術界において活躍し、貢献した美術家たちの再発見と顕彰をめざして開催される企画展です。今年度は、その第二十三回展として、工芸家秋山逸生に焦点をあてて開催します。

秋山逸生(あきやま いっせい)は、明治三十四年、東京市南葛飾郡隅田村(現東京都墨田区)に生まれました。大正七年から十四年まで島田逸山に師事して芝山象嵌(下総国・芝山出身の大野木専蔵が考案した象嵌技法)の技術を習得し、大正十一年には師とともに千葉県・市川町(現市川市)に移り住み、制作に励みました。その後、次兄鐵次郎から木画(彩色した木などを象嵌して絵画のように表現する技法)の技術を習い、また彫金家桂光春からは彫金技法を学びました。昭和十五年には日本彫金会会員となり、



秋山逸生(1901～1988)  
(市川市広報公聴課提供)

昭和十七年、第五回文部省美術展覧会(新文展)に「銀線文象嵌管」を初出品して入選したことは本格的な作家活動を始める契機となりました。秋山逸生は、芝山象嵌、木画および彫金の技法を駆使して独自の「木象嵌」の世界をつくりあげ、昭和三十六年の第四回日展に「金銀木画管」

を出品、その後昭和四十年からは伝統工芸新作展に毎年出品を続け、さらに日本伝統工芸展にも出品し、精巧な象嵌技法によって幾何学的連続文様を嵌入した彼の作品は高い評価を受けました。昭和四十九年には、日本工芸会の正会員となり、五十六年の第二十八回日本伝統工芸

展に出品した「輪華文縞黒櫃印箱」はNHK会長賞を受賞しました。この年には既に八十歳になっていましたが、彼は大和古寺の仏像や宝冠などの荘厳さ、律動感に心を打たれました。その精進が認められ昭和六十二年、「木象嵌」の技法で国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定され、翌六十三年五月の第二十三回人間国宝新作展には「松毬木象嵌囊」を出品しましたが、この展覧会終了後の五月二十二日、急逝しました。

本展は、秋山逸生の初期の作品から、木象嵌の技法を用いた高雅で気品ある作風を確立した晩年に至るまでの約五十点の作品、及び関係資料などを展示し、その芸術を回顧します。(大久保 守)



「蝶貝象嵌箱」

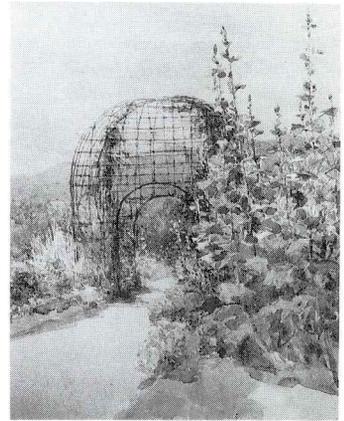
常設収蔵作品展

常設収蔵作品展では、一つの柱として「房総と近代美術」のテーマのもとに、本館の代表的な作品や鑑賞の要望の高い作品を展覧しています。本テーマにおいてはⅡ期後期(Ⅱ/4)で、浅井忠が西洋画の研究のため、文部省より派遣された、一九〇〇年から約二年間のヨーロッパ時代の活動に焦点をあて、浅井が滞欧中に描いた「欧州風景」、「農婦」などの作品やスケッチブック等の関係資料をはじめ、アールヌーボーに刺激を受けはじめた図案、さらには、パルビゾン派のコローの「ナポリ近郊の思い出」やフオンタ



コロー「ナポリ近郊の思い出」

ネージの「十月、牧場の夕べ」などの作品、滞欧中に浅井と交友のあった和田英作と塚本靖の作品、併せて約五十点を展示します。



浅井忠「京都高等工芸学校の庭」

料の他、浅井が教鞭を執っていた聖護院洋画研究所、関西美術院などの同僚や教え子の作品も併せて紹介します。主な展示作品として、浅井忠、京都高等工芸学校の庭、「婦人像」、梅原龍三郎「竹窓読書図」、安井曾太郎「熱海附近」などを紹介します。

十二月四日から三月二十七日まで開催されるⅢ期では金工に焦点をあて前期(Ⅲ/4)・中期(Ⅲ/2)・後期(Ⅲ/2)に分けて開催します。前期と中期の間に一部作品の展示替えを行い、前期を金工1、中期、後期を金工2として近代金工史に足跡を残した作家を紹介します。主な出品作品は香取秀真「鳩香炉」、津田信夫「北辺夜猫子」、信田洋「銀壺(花ひらく)」、山室百世「鑄銅草花置物」などです。

さらに、後期では金工のほか浅井がヨーロッパから帰国した明治三十五年(一九〇二)から明治四十年(一九〇七)に死去するまでの京都時代の活動に焦点をあてた展示も併せて開催します。浅井の日本画、洋画、工芸などの作品や関係資

なお、この「房総と近代美術」とは別に、モチーフに焦点をあてたテーマ展示を中期・後期をとおして行っています。このテーマ展示では、女性の様々な姿を描き出した作品「女性の表現」を開催します。主な展示作品として日本画では横尾芳月「夕粧」、洋画ではルノワール「少女像」、黒田重太郎「女と小犬」、中西利雄「四人の女」などを展示します。

第十七回  
千葉県移動美術館

千葉県移動美術館は、昭和五十二年から始まり、当美術館が収蔵する作品を、広範な千葉県の各市町村に巡回展示し、優れた美術作品にふれる機会を作ったものです。本年度は長生郡睦沢町と香取郡山田町を会場に行います。

おもな展示作品は、日本画では富取風堂「夕」、洋画は浅井忠の「老母像」今関啓司「浅春山路」円城寺昇「岩」菅谷元三郎「沼風景」、彫刻は大川逞一「聖観音」、工芸では香取秀真「笑獅子香炉」津田信夫「鳳翔薰炉」、書の小安花郎「バイロンの言葉」鈴木方鶴「一笑千山青」など日本の代表的な作家をはじめ、開催会場となる市町村の出身作家やゆかりの深い作家を中心に構成しています。会場及び会期は次のとおりです。

- 会場 睦沢ゆうあい館
- 会期 十一月十七日(水)
- 会場 睦沢ゆうあい館
- 会期 十一月十七日(水)
- 会場 山田町公民館
- 会期 十二月三日(金)
- 会場 山田町長岡一三〇三一二
- 会期 十二月三日(金)

第六回  
現代日本具象彫刻展  
作品公募のお知らせ

この展覧会は、「21世紀の飛躍」をテーマに、具象作家に作品発表の場を提供し、現代の具象彫刻の発展に寄与することを目的とし、親しみやすい具象彫刻作品を通して、県民の心にうるおいと豊かさを育む機会として開催するものです。

- ▼応募資格：国籍、経歴、年齢を問いません。
- ▼応募作品・規格：平成三年十二月以降に制作された具象的な彫刻作品。素材不問。ただし、展示可能なもの。幅1.8m以内、奥行き1.8m以内、高さ2.0m以内、総重量2.0トン以内。(台座を含む)
- ▼作品搬入日：平成五年十二月十一日(土)・十二日(日)
- ▼午前十時～午後四時
- ▼入賞・入選：大賞一点、優秀賞二点、入選約六十点
- ▼授賞式：平成六年二月四日(金) 午後二時 県立美術館講堂
- ▼会期：平成六年二月五日(土)～二十七日(日)
- ▼会場：県立美術館

◎詳細は 県立美術館学芸課まで

美の扉

私のうた

作品「朝」「花の国の母神」より

長谷川 昂

朝

ひとかたまりの彫材から  
もう一つのかたまりを

刻み分けようとする

私の力に抗して

彫材は 互に引き合っている

二つのかたまりの間に出来

た  
空間の緊迫が

私の感情をゆさぶり

私の小さな魂をそこへ誘う

出たり はいつたり

遊ぶ私の魂が

光を見た



「朝」

木彫の場合、彫材は単なる物質ではありません。何百年か地上にあって、人間と同じ様に、色々の悩みに堪えて生長して来ました。

悩みの中から美が生まれると私に教えてくれたのは、木や草なのです。いくら眺めていても、見あきる事のない魅力を彫材は持っています。でも、それはそれとして大事にしながら、樹霊のゆるしてくる限り、私の切実な心をうったえるしかありません。

花の国の母神

地球が、人間だけのものではない事は、誰でも承知して

いますが、人間が、意のままに振るまっても、心痛む事のないのは、馴れてしまつて

感じが鈍くなつているからでしょう。樹木は、あらゆる生物に公平にふるまっています。

春、花の盛りには、蜜を、秋は、見事な実りを、人間以外の小動物にも振るまつて、

互いに助け合つて、心を通わせています。花の春、多くの植物の実りを助けているのは、蝶や蜂、その中でも、蜜蜂の働きには、人間までその恩恵に浴して来ました。五千年の歴史の示す処です。でも、未だ、神様にはなっていないと聞いて、彫材に敬意を求めたのが、花の国の母神です。

私のうた

それは 自然の心

物の心

私の心

線

それは 心の軌跡

面

それは 心の合唱

鈍は 素材に 自らを打ちあて



「花の国の母神」

特別展「バルビゾン派と日本」展の開催期間中にひらく二つの講演会を御案内します。

美術講演会

日時 九月十八日(土)午後二時

演題 「バルビゾン派と自然」

講師 馬淵明子氏(日本女子大学助教授)

日時 十月二日(土)午後二時

演題 「バルビゾン派と日本の画家たち」

講師 原田平作氏(大阪大学教授)

※いずれも会場は本館講堂で参加者数は二〇〇人を対象としています。聴講料は無料です。

ミュージアムコンサート

自然の調べと名曲への招待

日時 九月二十五日(土) 午後二時～三時三十分

主催 (財)千葉県社会教育施設管理財団

演奏者(七名) フルート 赤木りえ、ヴァイオリン 本庄篤子、チェンバロ 戸室尚子、その他ニュー

1. フィルハーモニーオーケストラ千葉のメンバー

演奏は二部構成で第一部では、特別展「バルビゾン派と日本」展に関連して、自然を描いたバルビゾン派の作品のイメージから自然に因む曲四曲を演奏。第二部ではバロック音楽の中から名曲五曲を演奏。主な曲目は次の通り。

〈第一部 自然に寄せて〉

パストラル・シンフォニー(田園風序曲)(ヘンデル)

フルートソナタ「忠実な羊飼ひ」(ヴィヴァルディ) / 精霊の踊り(グルック) など

〈第二部 バロックの名曲〉

G線上のアリア(バッハ) / コラール「主よ人の望みの喜びよ」(バッハ) など

会場 県立美術館講堂

定員 二〇〇名

料金 無料

◎申込方法

往復葉書に住所・氏名・電話番号及び「コンサート希望」を明記して美術館あてに、九月十二日(土)必着。(一通につき一名記載)定員をこえた場合は抽選。

ごあんない 実技講座 (9月以降)

情報資料室だより

◆彫刻講座

木を素材に、人物をモチーフとして、用具の取り扱い方をはじめ、立体の表現方法を学習します。

会期 10月19・20・21・22・23・24・26・27・29・30・31

講師 11月2日  
渋谷三朗氏  
定員 15名  
締切 10月5日(火)



洋画講座

◆金工講座

銅板を素材として、レリーフの技法で鍛金の基礎を学習します。

会期 1月25・26・27・28・29  
2月1・2・3・5・6・8・9日

講師 小林正利氏  
定員 15名  
締切 1月11日(火)



金工講座

◆陶芸講座(2)

陶磁器の見方や、用具の取り扱い方、釉薬の調合、焼成の方法などを、茶碗、花器などの制作を通して学習します。

会期 11月9・10・11・12・13・14  
12月3・8・16日

講師 神谷紀雄氏  
定員 30名  
締切 10月26日(火)

会期 11月11・12・17・18・19・20・21・23・24・25日

講師 松沢茂雄氏  
定員 30名  
締切 10月28日(木)

◆書芸講座

漢字の臨書をテーマとして書の見方や歴史を学びながら幅広い表現方法について学習します。

会期 11月30・12月1・2日

講師 中村象閣氏  
定員 25名  
締切 11月16日(火)

《申込方法》

往復はがきに希望講座名、氏名、住所、電話番号を明記のうえ、美術館普及課までお申し込みください。

なお、定員を越えた場合には抽選となりますので御了承ください。

△美術雑誌  
生活美術(全27冊揃) 造形芸術(20冊)

●特別展関連図書  
特別展「バルビゾン派と日本」展に関連してバルビゾン派の画家たちの資料を御覧頂けます。

ミレー画集 バルビゾンの画家たち ミレー(名作100選) クールベ・ミレー・コロー

世界の名画4(クールベと写真主義) 世界の巨匠シリーズ(コロー・ミレー・クールベ) ほか

●開室日 火・金(祝日を除く) 12時30分〜4時30分

△研究書・評論集  
近代日本美術の研究 日本銅版画志 日本版画変遷史 京都に於ける日本画史 プロレタリア絵画論 日本近代美術事件史 岸田劉生・椿貞雄の回想から 劉生絵日記(全3巻) 木村莊八全集(全8巻) 老画家の一生(上・下) 藤川勇造ノート 高村豊周文集 II 日本美術作品レファレンス事典(絵画篇・浮世絵) 漢詩名句辞典 定本墨場必携集成(全5巻) 日本国宝事典(工芸・技術編) ほか

〈交通案内〉

- JR総武線「千葉駅」より「千葉ポートタワー」バス15分「美術館・郵便局前」下車徒歩1分
- JR京葉線「千葉みなと」駅下車徒歩8分

